スペイン語の呼びかけ語 hijo/a, chico/a について *

野村 明衣

[抄録]

学位論文では、文末に現れる呼びかけ語は、先行発話内容に対する話し手の態度を表すと結論づけた（野村 2014）。特に固有名詞以外の名詞や形容詞は、その意味に従って話し手が聞き手がある立場に立たせることによって先行発話に対する話し手の態度を表明しようとするものであり、発話を強めたり和らげたりすることができる。では、どちらも普通年上の話し手から年下あるいは同年齢の聞き手に用いられ、よく似た語彙的意味を持つ hijo/a と chico/a は、呼びかけ語全体の中でどのような特徴を持つのだろうか。本稿では hijo/a と chico/a が用いられるのは、話し手と聞き手がどのような関係にある場合かを考察し、これらの呼びかけ語が使用しやすい文脈と、発話与える影響を明らかにする。

キーワード：呼びかけ語、間投詞、hijo, hija, chico, chica
vocativo, interjección, hijo, hija, chico, chica

0. はじめに

スペイン語では、話し手と聞き手が円滑なコミュニケーションを実現するための手段の一つに、一定の言語形式を付加して「人あたり¹⁾ (小田 2010: 189)」を調節するというものがある (野村 2014 : 265)。野村 (2014) では、verdad、no、eh、呼びかけ語、sabes、entiendes、ves、oye、mira、verás、fíjate、vamos を大きく間投詞とみなし、文頭および文末におけるそれぞれの統一的な機能を考察した²⁾。文頭では、話し手が聞き手をどのように後続発話に導こうとしているかを表す聞き手管理機能を果たす。情報伝達を目的とすれば oye を用いて聞き手の注意を喚起し、聞き手を理解に導こうとするなら mira を用いて発話内容に注目するよう聞き手の注視を促す。また文末では、様々な表現を使い分けて話し手の発話内容に対する態度を表明する。発話内容が真であることを前提にして問うなら ¿verdad? を、聞き手が否定する余地を残して問うなら ¿no? を用いる。聞き手に対して発話内容への理解を求める時、話し手が聞き手に発話内容を受け入れてくれるだろうと判断すれば sabes を、聞き手が受け入れ難くても理解するよう求めるなら entiendes を用いる。また、具体的意味を持たない ¿eh? を音調が最も反映されやすい文末に置くことによって、発話内容へ注意喚起し、発話内容に対する聞き手の反応 (確認や理解) を求める。スペイン語において、これらの言語形式の選択基準は話し手が発話内容をどのように伝達したいかであり、発話内容への話し手の態度を付加することによって「人あたり」を調節する。

呼びかけ語も上記の間投詞の例外ではない。文頭では、聞き手の注意を喚起する機能を果たし、文末では話し手が発話をどのように伝達しようとしているかを表すものである。特に文末に積極的に現れ、固有名詞の場合には話し手が聞き手の名前を呼ぶことができる関係であること、あるいは聞き手に心理的に接近して発話を伝達しようとしていることを示して、発話を強めたり和らげたりする。また、普通名詞や形容詞も呼びかけ語として多く使用される。例えば、señor は聞き手との社会的関係を明示して敬意を表明する。また、cariño は聞

き手への愛情を表すので発話の和らげとなり、*tonto* は本来侮辱的な表現だが、話し手と聞き手が親しい場合には親愛表現となる³⁾。名詞や形容詞は、その意味に従って話し手が聞き手にある立場に立たせることによって先行発話に対する話し手の態度を表明するものであり、発話を強めたり和らげたりすることができる。文末の呼びかけ語は、それが固有名詞であるかそれ以外であるかによって、異なるプロセスで話し手の発話態度を付加するのである。

さて、同じく呼びかけ語として多用されるものに *hijo/a*, *chico/a* がある。本稿ではこの *hijo/a*, *chico/a* の文末における用法に焦点を当て、年齢差や性差を手がかりにして、その機能を明らかにし、文頭と文末の位置によって機能が異なる間投詞の一部としての呼びかけ語の中で、この *hijo/a*, *chico/a* がどのような特徴を持つのかについて考察する。まず、呼びかけ語はどのような場合に付加されるのかを明らかにするために、個人名を含めた呼びかけ語全体の出現頻度を調査する。次に、*hijo/a*, *chico/a* がどのような年齢差や性差、また文脈で使用されるのかを、スペイン語母語話者を対象に実施したアンケートの結果を通して考察する。その結果から *hijo/a*, *chico/a* の機能を仮説立て、スペイン映画のシナリオから収集した実例を用いて検証する。

1. 先行研究

まずは、*hijo/a*, *chico/a* に関する辞書の記述と先行研究を見てみよう。*Moliner* (1998; 2007: 1551) は呼びかけ語としての *hijo/a* について、次のように述べている。

En conversación familiar es muy corriente emplearlo, particularmente las mujeres, como vocativo intercalado en lo que se dice a un niño o a una persona más joven o de menos respetabilidad que la que habla, bien cuando se adopta un tono afectuoso o bien con enfado o impaciencia en exclamaciones con *ay o pues* : (...).
(*Moliner* 1998; 2007: 1551)

hijo/a は、特に女性がぐだけた発話場面で、子どもあるいは話し手よりも年下の人に対して、また話し手が精神的優位に立つ場合に使用される。そしてこれは、愛情をこめて、または *ay* や *pues* を伴った感嘆で怒りや苛立ちをこめて使用されると説明している。また、*Seco et al.* (1999; 2011: 2453) でも同様の記述が見られる。

Se emplea como vocativo afectivo, esp dirigido a un niño o a una pers más joven que la que habla. (...) Se emplea en fórmulas de reproche o protesta.

(Seco *et al.* 2011: 2453)

すなわち、子どもや年下の聞き手に向けられる愛情をこめた呼びかけ語であり、非難や抗議の意味を持つ形式としても使用されるという。これらの記述から、hijo/a は年下の聞き手に対して用いられることがわかるが、Beinhauer (1929; 1963) には次のような記述がある。

El vocativo *hijo, hija* se usa con y sin pronombre posesivo. No existiendo posesión auténtica, la expresión *hijo mío* supone un modo de “captatio benevolentiae”. “Lo que nos pertenece ponémoslo bajo nuestro amparo, nos interesa de un modo singular” (SPITZER). Lo mismo ocurre en aquellos casos en que no se trata de una relación filial verdadera, sino sólo fingida. Entre el pueblo este empleo de *hijo, hija*, incluso en relación con personas desconocidas, se halla muy difundido. Casi siempre, como es natural, son personas de edad las que se permiten esta confianza con otras más jóvenes. (...) Pero este tratamiento puede darse igualmente aunque no exista diferencia de edad entre los interlocutores.

(Beinhauer 1929; 1963: 26)

hijo/a は実際の親族関係になくても使用可能であり、普通話し手が聞き手よりも年上である場合に用いられるが、年齢差がない場合にも用いられるという。語彙の意味からも話し手よりも年下に向けられるはずの hijo/a が、年齢差のない聞き手に対して使用されるのはどのような場合なのだろうか。

また、Edeso Natalías (2005: 132) には次のような説明がある。

También suelen utilizarse las formas *hijo/hija, hijo mío/ hija mía*, etc., que se suponen amables para el alocutario por establecer lazos filiales metafóricos.

(Edeso Natalías 2005: 132)

hijo/a は、話し手と聞き手の間に疑似的な親子関係を作り出すことによって発話に優しさを与えるという。この記述を手がかりに、hijo/a がどのような文脈で使用されやすいかを考察してみよう。

また、同じく年下の聞き手に用いると考えられる呼びかけ語に *chico/a* がある。Moliner (2007: 637) は、*chico/a* が子ども (*niño*) や少年 (*muchacho*) を指すと記述しているが、その用法については次のように説明をしている。

Se emplea para referirse a una persona, aunque sea adulta y no joven, con la que se tiene familiaridad. (Moliner 2007: 637)

chico/a は、大人や若者ではない聞き手にも親しみをこめて使用される。これと同様の記述が西和中辞典 (2007: 427) に見られる。*chico* は小学校高学年から大学生、30代の大人までを指し、大人同士でも相手が若いかな近い年齢なら使用するのだという。さらに Salvador (2001: 237) は次のように説明している。

Se emplea en la conversación para dirigirse a una persona de cualquier edad, con la que se tiene confianza. (Salvador 2001: 237)

chico/a は、信頼のある関係においてどんな年齢の人にも向けられるという。これに従えば、*chico/a* は親しい人であれば年齢差に関わらず使用できることになるが、実際にはどうなのだろうか。また、Salvador (2001) には、次のような記述がある。

Se usa expletivamente como vocativo, especialmente en lenguaje femenino y en tono de familiaridad. (Salvador 2001: 237)

chico/a は特に女性が親しみをこめて話す場合に、特別な意味を持たずに使用されるという。しかし、呼びかけ語には個人名をはじめとして *hijo/a* や *cariño*、*tonto* など様々な語彙があり、話し手は発話内容をどのように伝達したいかによってこれらを使い分ける (野村 2014: 112)。そのため、語彙的意味を持つ *chico/a* が特別な意味を持たないはさみ語 (フィラー) として用いられるとは考えにくい。だが、*chico/a* が発話にもたらす効果に関する言及はなく、管見ではそれを扱った先行研究も見られない。一体、*chico/a* はどのような年齢の聞き手に対して、またどのような文脈で使用されるのだろうか。

2. 呼びかけ語の出現頻度

hijo/a, chico/a の具体的な用法を考察する前に、そもそも、呼びかけ語というもの、それが何であるにせよ、対話においてどの程度出現するのか、どのような場合に頻出するのかについて見ていこう。スペイン語における呼びかけ語の先行研究には、主に Beinhauer (1963)、Bañón (1993)、Alonso Cortés (1999) や Edeso Natalías (2005) が挙げられる。これらはいくつかの呼びかけ語に関する記述はしているが、出現頻度やどのような場合に用いられるかという根本的な問題には言及していない。そこでこの節では、資料に *Tres sombreros de copa* (1979) を用いて、その傾向を探ってみよう。具体的には、一人の話し手が聞き手に対して50文以上の発話を展開しているシーンを選び、文末に出現する呼びかけ語の頻度を、話し手と聞き手の関係とともに調査した⁴⁾。その結果は次の通りである。シーンは話し手と聞き手の対話の場面を表し、発話場面はそのシーンにおける発話の方向性を表す。

表1 呼びかけ語の出現頻度

シーン	発話場面	話し手→聞き手	話し手と聞き手の関係	出現頻度
シーン1	A	Don Rosario → Dionisio	旧知の仲	15%
	B	Dionisio → Don Rosario		13%
シーン2		Paula → Buby	恋人	7%
シーン3	A	Paula → Dionisio	初対面	0%
	B	Dionisio → Paula		0%
シーン4	A	Fanny → Dionisio	初対面	7%
	B	Dionisio → Fanny		0%
シーン5	A	El odioso señor → Paula	初対面	8%
	B	Paula → El odioso señor		2%
シーン6		Buby → Paula	恋人	6%
シーン7	A	Don Sacramento → Dionisio	婚約者の父親	7%
	B	Dionisio → Don Sacramento		9%
シーン8	A	APaula → Dionisio	恋人	7%
	B	Dionisio → Paula		4%

一人の話し手から同一の聞き手に対する発話が50文以上からなる発話場面は14場面見られたが、その中で呼びかけ語を伴わない（出現頻度0%の）ものが3場面、2～15%の文に呼びかけ語を伴うものが11場面であった。出現頻度が0%だったのは、いずれも話し手と聞き手が初対面のシーンである。例えばシーン3のDionisioとPaulaは全くの初対面であり、この発話場面では呼びかけ語は一度も使用されていない。しかしながら、同じく初対面であっても発

話場面 4A では 7 %、5A では 8 % もの出現率がある。そこで、それぞれの発話場면을精査すると、4A では、Fanny は Dionisio に好意をもって話しかけているが、4B で見ると Fanny からの好意を受け入れたくない Dionisio の発話には呼びかけ語は付加されていない。また、5A における el odioso señor は Paula に盛んに求愛を繰り返しているが、Paula は彼に対しては興味を示していない。しかし、el odioso señor にお金をせびる場面では caballero と 2 度呼びかけ語を使用している (5B)。これらのことからわかるのは、呼びかけ語の出現は、初対面か旧知かというよりむしろ、話し手が聞き手に対して何らかの働きかけの意図があるかどうかによって依存しているのではないかということである。ただ、初対面で出現が比較的少ないのは、一般的に初対面という場面では、働きかけという行為が少ないからであろう。

これに対して、話し手と聞き手が親しい関係、あるいは初対面であっても話し手が聞き手と親しくなりたいと考えている関係では呼びかけ語の使用が認められた。呼びかけ語の出現頻度は最も多いもので 15% 程度であり、呼びかけ語が付加されない文が圧倒的に多い結果となったが、15% という約 6 文に 1 度呼びかけ語が用いられることになり、頻繁に呼びかけている印象を受ける。親しい関係では聞き手への働きかけを行いやすいと考えられるので、話し手の発話態度を付加して発話を調節する呼びかけ語の出現頻度が高いのだろう。つまり、呼びかけ語のある文は、それが無い文と比べると、聞き手に何らかの働きかけをしようとしていると言えることができるだろう。

また、親しい関係であっても、7A の発話場面では話し手 Don Sacramento が聞き手 Dionisio に不信感を抱いているシーンで、普段呼んでいる個人名ではなく聞き手に距離を感じさせるような caballero という語彙を選択している⁵⁾。このことから、聞き手への働きかけは必ずしも和らげなどの好意的なものではなく、呼びかけ語を用いて、それによって聞き手を遠ざけて発話内容に厳しさを加味する場合もあると考えられる。

この結果から、話し手が聞き手と親しい場合、あるいは親しくなりたい、遠ざけたい等何らかの聞き手への働きかけがある場合には呼びかけ語が使用され、原則として初対面の相手など、聞き手に対して働きかけようという意図が希薄な場合には、呼びかけ語は出現しにくいことが明らかになった。聞き手への働きかけがなければ、発話内容にどのような伝達態度を付加するかに無関心であり、知的意味の伝達のみで十分なので呼びかけ語は用いられない。しかし、聞き手への働きかけがあれば、呼びかけ語を用いて発話態度を積極的に調節しよ

うとする。実際に、シーン3とシーン8の対話者は同じだが、初対面のシーン3では共に0%、恋仲になったシーン8では4%と7%にまで上がっている。最初は聞き手への働きかけが少なく、発話内容の伝え方に無関心だが、恋仲になってからは親密度が増したので発話を調節しようとしているのだと考えられる。したがって、呼びかけ語は主に話し手と聞き手が親しい関係、あるいは働きかけようとする場面で使用されるものであり、働きかけの意図がなければそもそも付加されないとと言える。

では、聞き手への働きかけを表す呼びかけ語の中で、「息子、娘」や「子ども、少年」という語彙の意味を持つ *hijo/a*, *chico/a* はどのような特徴を持つのだろうか。

3. アンケートによる分析

3.1. アンケート調査

hijo/a, *chico/a* の使用に話し手と聞き手の年齢差や性差が関わるかを調査するため、スペイン出身の母語話者6名にいくつかの対話を提示して意見を求めた⁶⁾。前節で見たように、呼びかけ語は、聞き手に対して働きかけが起こりやすい親しい間柄で多用される。したがって、*hijo/a*, *chico/a* のアンケート調査でも、話し手と聞き手に信頼がある関係において、聞き手をなだめる場面、修辭的な感嘆の場面、聞き手を非難する場面、そして激励という4つの聞き手に働きかける場面を設定した。また、話し手と聞き手のそれぞれの年齢と性別を明記して母語話者に提示した。年齢は、60才と30才とし、年上の話し手(60才)から年下の聞き手(30才)、年下の話し手(30才)から年上の聞き手(60才)、話し手と聞き手どちらも同年齢(30才)という3つのパターンを設定して、聞き手への返答としての発話に *hijo/a* と *chico/a* を用いることができるかを尋ねた。

では、聞き手をなだめる場面から見ていこう。この例では、呼びかけ語を付加する発話に命令を選んだ。命令は、FTA⁷⁾ (face threatening acts 面子侵害行為)に分類されるのだが、頻繁に呼びかけ語を伴い、それによってFTA的威力を和らげたり強めたりすることができるので、聞き手への働きかけとして明瞭だと考えられる(野村 2014: 118)。話し手と聞き手は会社の同僚とし、打ち合わせに遅刻しそうな聞き手をなだめる発話に伴う呼びかけ語を空欄にし、母語話者には話し手と聞き手の年齢差と性差を示した解答欄に記入してもらった。

- (1) [A y B son compañeros/as de la oficina y están comiendo juntos/as. A mira el reloj y piensa que va a llegar tarde a la reunión preliminar con un cliente.

Le entran los nervios y se pone a recoger la mesa.]

A: ¡Que voy a llegar tarde!

B: Tranquilo/a, no te preocupes, ()..

A: Gracias.

この例についてのアンケート結果は以下の通りである。性別は話し手と聞き手のそれぞれの性別、年齢差は話し手と聞き手の年齢の上下を表す。A～Fは回答者、○は使用可、△は条件付きで使用可、×は使用不可を意味する。

表2 なだめる場面における hijo/a, chico/a のアンケート結果

性別	年齢差	hijo/a						chico/a					
		A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F
男→男	上→下	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
	下→上	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△
	同	○	×	×	△	×	△	○	○	△	○	×	○
男→女	上→下	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○	×	○
	下→上	△	×	×	△	×	×	×	×	×	○	×	△
	同	○	×	○	△	×	×	○	○	○	○	×	○
女→女	上→下	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
	下→上	△	×	×	△	×	×	×	×	×	○	×	△
	同	○	△	○	○	×	△	○	○	○	○	○	○
女→男	上→下	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	○
	下→上	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	△
	同	○	△	△	△	×	△	○	○	○	○	×	○

この結果を、○を3点、△を1点、×を0点として点数化したものが表3である。

表3 なだめる場面における hijo/a, chico/a の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hijo	18	1	5
	chico	16	1	13
男→女	hija	18	2	7
	chica	13	2	15
女→女	hija	18	2	11
	chica	16	3	18
女→男	hijo	18	0	7
	chico	14	2	15

この結果を見ると、hijo/a, chico/a 共に年下の聞き手に対しての使用は自然であることがわかる。しかし、年上の聞き手に対してはどちらも点数が低く、この場面においては hijo/a, chico/a は年下の話し手からは使用しにくいことがわかる。一方、同年齢での使用は hijo/a よりも chico/a の方が点数が高い。また、話し手と聞き手が同性の場合の hijo/a の使用を比べると、男性同士よりも女性同士の方が高い点数となっている。

次の例も見てみよう。この例では、Moliner (2007) や Seco *et al.* (2011) が hijo/a の用法として指摘していた感嘆的な非難を表す場面を設定した。話し手は、聞き手が駅で起こった事故について当然知っているだろうと判断して発話をするが、それを知らなかったことを修辭的に非難する例である。アンケート結果は表4の通りである。

- (2) [A y B son compañeros/as de la oficina y tienen mucha confianza. Hablan sobre un accidente que se ha producido esa mañana en la estación.]

B: Sabes que hubo un accidente en la estación, ¿verdad?

A: Pues no lo sabía.

B: ¡Ni siquiera sabías eso, () !

表4 感嘆的な非難の場面における hijo/a, chico/a の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hijo	18	7	8
	chico	18	6	18
男→女	hija	18	9	9
	chica	13	3	16
女→女	hija	18	8	13
	chica	18	7	16
女→男	hijo	16	10	12
	chico	18	6	15

この例における、年下の聞き手への使用を先の (1) と比べてみよう。(1) における hijo/a, chico/a の話し手および聞き手のあらゆる性の組合せの点数を総計すると、72 : 59 となる。一方、(2) は 70 : 67 であり、(1) と比べて chico/a の点数が増加している。(1) は聞き手の気持ちを慮って優しく発話を伝達する場面であるが、(2) はむしろ非難的な発話である。(2) の場面で chico/a の点数が上がっているということは、chico/a は優しく伝達する和らげとしては使

用されにくいのではないかと推測される。

次に同年齢での結果を見てみよう。同年齢での *hijo/a*, *chico/a* の点数の合計は、(1) では30:61、(2) では42:65であり、*hijo/a* の点数が増加している。(2) は修辭的に聞き手への非難を表す場面なので、Moliner (2007) が指摘するように、話し手が聞き手より精神的優位に立って発話していると考えることができるだろう。Edeso Natalías (2005) は、*hijo/a* について疑似的な親子関係を作り出すと記述しており、これに従えば、*hijo/a* の使用はそれが持つ語彙の意味によって、聞き手を手として扱い、話し手の優位を表明する。年下の聞き手へは、それが愛情として伝達されるが、同等であるはずの同年齢の聞き手を手を子ども扱いするのは不自然なので、(1) の発話場面では同年齢の *hijo/a* の点数が低いのだろう。しかし、聞き手より優位に立って非難する (2) の発話場面では、同年齢の聞き手にも使用可能なのだと考えられる。

そうすると、(1) では許容されにくかった年上の聞き手に対する使用が増えているのも納得できる。年上の聞き手への *hijo/a*, *chico/a* の点数の合計は、(1) では6:8であるのに対して、(2) では34:22である。年下や同年齢の聞き手に対する使用よりは点数が低い、本来年上の聞き手には使用しにくいこれらの呼びかけ語が、聞き手への優位を表す状況では使用可能になるのだろう。さらに、その場合にも *chico/a* よりも *hijo/a* の点数の方が高い結果となっている。これは、*hijo/a* が疑似的な親子関係を作り出すことによって、聞き手よりも優位に立とうとする話し手の姿勢を表すことによると考えられる。

なお、ここでも同年齢における女性同士の *hija* の点数が男性同士の場合よりも高く、女性の話し手から男性の聞き手に対する *hijo* の点数も、女性同士の場合と同程度であった。この結果は、*hijo/a* は特に女性が用いるという Moliner (2007) の記述と一致しており、女性からの方が男性からよりも *hijo/a* を使用しやすいと言えることができるだろう。

では、和らげるの必要がない明らかな非難の場面ではどうだろうか。次の例は、電話をしている話し手が隣で大声で話す聞き手に腹を立てる場面である。表5にアンケート結果を示す。

- (3) [A y B son compañeros/as de la oficina y tienen mucha confianza. A está hablando con su cliente por teléfono y al lado está B charlando con una compañera.]

B: Oye, habla un poco más bajo, que estoy hablando con mi cliente.

(A no le hace ni caso y sigue hablando alto.)

B: ¿No me has oído? ¡Habla más bajo, ()!

A: Ah, lo siento.

表5 非難の場面における hijo/a, chico/a の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hijo	16	0	5
	chico	16	8	16
男→女	hija	16	1	8
	chica	16	7	18
女→女	hija	16	2	11
	chica	16	10	18
女→男	hijo	16	2	11
	chico	16	8	18

これまでは、年下の聞き手に対する hijo/a の点数が chico/a よりも上回っていたが、この例では chico/a と同列となっている。(1) における年下の聞き手に対する hijo/a と chico/a の点数と比べると、(1) は 72 : 59 であるのに対して、(3) は 64 : 64 であり、hijo/a の点数が減少している。

また、年上の聞き手および同年齢の場合にも chico/a の方が hijo/a よりも明らかに点数が高い。この発話場面は、先行する ¿No me has oído? という発話からも、話し手が聞き手に腹を立てていることがわかる。(1) と (3) はどちらも命令の例だが、聞き手をなだめる (1) とは異なって、(3) は厳しく、聞き手への強制力も強い。hijo/a の点数が、(1) の場面での点数が高く、(3) では減少しているということは、hijo/a には和らげの効果があると考えられることができるのではないだろうか。聞き手を疑似的な子の立場に置く hijo/a を付加すると、親が子を叱るような印象を与え、発話を優しく伝達すると推測される。一方、chico/a が (1) の場面よりも (3) で増加しているのは、先に見たように chico/a には和らげの効果がないことが理由だろう。そのため、非難の場面で使われやすく、むしろ厳しい印象を与えるのだろう。つまり、非難の場面では年下の聞き手に対して hijo/a, chico/a のどちらも使用することができるが、それぞれを伴うことによるニュアンスは異なると言える。

なお、この例でも同年齢における hijo/a の使用は、話し手が女性である場合の方が点数が高く、聞き手を明らかに非難する厳しい発話にも、女性からであれば hijo/a が使用しやすいことがわかる。

では、chico/a の聞き手への働きかけは、厳しさだけなのだろうか。次の激励の発話場面を見てみよう。自らの不運を嘆く聞き手を励ます場面の発話である。表 6 にアンケート結果を示す。

- (4) [A y B son compañeros/as de la oficina y tienen mucha confianza. Hablan de desventuras recientes de A.]

A: Así que no quiero salir ni a trabajar, que no ocurrirán nada más que malas cosas.

B: ¡Anímate, () ! Las cosas solo pueden mejorar.

表 6 激励の場面での hijo/a, chico/a の使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hijo	18	6	10
	chico	16	8	16
男→女	hija	18	6	11
	chica	16	7	18
女→女	hija	18	9	14
	chica	16	10	18
女→男	hijo	18	6	12
	chico	16	8	18

この例では、年下の聞き手へは再び hijo/a の点数が chico/a より上回っている。この例は厳しく伝達する場面ではないので、優しく働きかける hijo/a が高い点数となるのも納得できる。しかし、年上と同年齢の聞き手に対しては chico/a の点数が高い。先の例で考察したように、同年齢の聞き手に対する hijo/a は、疑似的な親子関係を作り出すことによって話し手の優位を表し、それが激励の場面では横柄に感じられるので、chico/a と比べて使用しにくいのではないだろうか。一方、(3) における非難の発話で使用されやすかった chico/a は、厳しく聞き手に働きかけるものだと考察したが、この激励の場面でも点数が高いことから、厳しさだけを表すのではなく、叱咤激励のように働きかける面もあるのだと考えられる。

このように、hijo/a は優しく伝達する場合や、話し手の精神的優位を表す文脈で使われやすく、chico/a は厳しく伝達する場合や、叱咤激励の文脈で使われやすいことがわかった。どちらも年上の話し手から年下の聞き手に対する使用を基本とし、chico/a は同年齢の聞き手にも使用しやすいと言える。

さて、呼びかけ語はそもそも聞き手に対して働きかけの意図が希薄な場合には現れないと考察したが、次の例では内容伝達が中心である発話場面を設定し、呼びかけ語の必要性を調査した。この例については、hijo/a, chico/a の使用可能性と共に、呼びかけ語を付加しない可能性についても尋ねた。話し手が、会議に参加できなかった聞き手の質問に答える場面である。表7にアンケート結果を示す。

- (5) [A y B son compañeros/as de la oficina. Hablan de la reunión de la semana pasada a la que A no pudo asistir.]
A: ¿Quién vino a la reunión?
B: Vino el director González, () .

表7 内容伝達の場面におけるhijo/a, chico/aの使用可能性

性別	語	上→下	下→上	同年齢
男→男	hijo	4	0	0
	chico	4	1	2
	φ	18	18	18
男→女	hija	5	0	0
	chica	4	1	5
	φ	18	18	18
女→女	hija	7	1	4
	chica	5	5	5
	φ	18	18	18
女→男	hijo	7	0	2
	chico	5	1	3
	φ	18	16	16

この場面では、これまで見てきた例と比べてhijo/a, chico/aの点数はかなり低い結果となった。それに比べて、呼びかけ語を付加しないφ形式は圧倒的に点数が高い。このことから、聞き手の質問内容に答えるのみの発話においては、内容伝達のみで十分であり、発話をどのように伝えるかについて無関心なので、呼びかけ語の付加がそもそも必要ないことがわかる。

3.2. hijo/a

これらの結果を踏まえて、hijo/aの機能を仮説立ててみよう。hijo/aは親族名称なので、Edeso Natalías (2005) が説明するように、話し手と聞き手との間に擬

似的な親子関係を作り出す。聞き手を親子関係に置いて発話内容を伝達していることを表すので、親が子に対して持つ愛情に類似したものが発話に付加され、結果的に発話を和らげる効果を持つと考えられる。そのため、年下の聞き手への使用が基本であり、同年齢の聞き手に対して用いると、聞き手を子ども扱いする印象を与える。しかし、聞き手に対して精神的優位を表す文脈においては、同年齢の、さらには年上の聞き手に対する使用も許容されやすい。Moliner (2007) は *hijo/a* が感嘆で怒りや苛立ちをこめて発話する場合に用いられる、そして Seco *et al.* (2011) は非難や抗議の意味を持つと記述していたが、どちらも精神的な優位を示すことによるものだと考えられる。しかし、その場合にも *hijo/a* の語彙の意味から、優しい印象を与えるのだろう。また、*hijo/a* は Moliner (2007) が指摘するように、特に女性からの方が使いやすいようである。これは女性であれば、自らを聞き手の母親的立場に置くことができるからだと推測される。

3.3. *chico/a*

次に *chico/a* について考えてみよう。*chico/a* は、基本的に年下あるいは同年齢の聞き手に対して使用される。特に、同年齢の聞き手に対しては、*hijo/a* を用いると聞き手より優位に立とうとする姿勢が現れてしまうので、どんな文脈であっても *chico/a* の方が使いやすいようである。Salvador (2001) は、信頼がある関係でどんな年齢にも使用されると記述していたが、聞き手を自らより下か同等に扱うものなので、年上の聞き手には使用されにくい。また、親族名称である *hijo/a* とは異なって和らげとしての効果はなく、非難のような厳しい場面や激励の場面で使われやすい。だが、*chico/a* は「子ども、少年」という語彙の意味を表すものであり、ここに厳しさを表す要素はない。そのため、*chico/a* そのものが発話に厳しさを与えるとは考えにくい。*chico/a* はそれが付加されることによって聞き手に働きかけるものであるが、その働きかけは無標のものであり、付加される文脈次第で、厳しくも叱咤激励のようにも解釈されるのだろう。先行研究で *chico/a* の機能に関する詳しい言及がないのは、無標の働きかけなので記述しにくいことが理由ではないだろうか。一方、*hijo/a* は聞き手を疑似的な親子関係に置いて発話することになるので、聞き手への働きかけとしては、優しさの意味素性をプラスする有標の形式であると言えることができるだろう。

次節では、この仮説に従って、*hijo/a*, *chico/a* の機能を検証する。

4. 実例による分析

優しさの意味素性を持つ *hijo/a* と、聞き手への働きかけとしては無標の形式である *chico/a* が付加された発話には、何らかの差があるだろうと仮定して、スペイン映画のシナリオから収集した例を用いてアンケート調査を行った。シナリオから得られた発話において、呼びかけ語の箇所を空欄にして、*hijo/a* と *chico/a* のそれぞれを入れた場合の印象を5つの選択肢から選んでもらった。選択肢には、聞き手を疑似的な子として扱い、和らげ効果を持つ *hijo/a* が発話に与えるであろう優しさ (*cariñoso*)、聞き手の子として扱うことによって時に聞き手に感じさせてしまうであろう失礼さ (*descortés*)、聞き手への働きかけとして無標の形式である *chico/a* が文脈に応じて発話に与えるであろう冷たさ (*seco*)、厳しさ (*duro*)、励まし (*estimulante*) の5つを用意した。

では具体例を見てみよう。次の例は、Lydia という女性の死について、年上の女性看護師 Rosa と年下の聞き手 Marcos が話すシーンである。Rosa と Marcos は何度も顔を合わせている知り合いである。このアンケートの結果を、表8に示す。

(6) [Rosa coge el teléfono en el mostrador de su planta. Responde de modo rutinario.]

Rosa : ¿Sí...? ¿Quién es?

Off Marco : Soy Marco Zuloaga...

Rosa : (Los ojos se le humedecen.) ¡Marco...!

Off Marco : Estoy en Jordania... ¡y he leído que Lydia ha muerto...!

Rosa : Sí, (), sí. Lo siento mucho, Marco.

(*Hable con ella*: 173)

表8 *Hable con ella* の例における *hijo/a*, *chico/a* の印象

	A	B	C	D	E	F
<i>hijo</i>	<i>cariñoso</i>	<i>cariñoso</i>	<i>cariñoso</i>	<i>cariñoso</i>	<i>cariñoso</i>	<i>cariñoso</i>
<i>chico</i>	<i>estimulante</i>	<i>cariñoso</i>	<i>poco natural</i>	<i>cariñoso</i>	<i>seco</i>	<i>seco</i>

この例では、*hijo* を付加した場合、全員が優しく感じると回答している。一方、*chico* の結果を見ると *hijo* とそれほど差がないという回答者がいる反面、冷たい、励ましという回答や、不自然だとする解答もあった。*chico* が励ましとして機能するのは、(6) が残念な知らせについて同情をこめて話す場面であるた

めであろう。だが、聞き手への働きかけが無標であるはずの chico が冷たく感じられるのは、和らげ効果を持つ hijo との比較によるものではないかと考えられる。

もう 1 例見てみよう。年配の神父である Rector が若い修道士 Hermano Salvador の相談に乗っているシーンの発話である。指導者と修道士という親しい関係なので、呼びかけ語が使用されている。アンケート結果は表 9 の通りである。

(7) Hermano Salvador: Lo que usted quiera. Pero yo esperaba que, de vuelta al seminario, se acabara... esto. Me librara de la pesadilla.

Rector : Y, ¿por qué ibas a librarte? El demonio no descansa. Es su negocio.

Hermano Salvador : Sí, pero yo creo que echo mano de todas las armas que nos da la religión. Yo quiero ver a cada mujer como a una Eva, madre de todos nosotros, antes del pecado. O como a las mártires que dejaron que los leones del circo desgarraran sus carnes y se las comieran vivas antes que perder su virtud.

[El Rector cabecea, divertido :]

Rector : No es buen camino ese, (①) . Por las calles no verás a Evas. Porque estarás conmigo que ninguna va desnuda. Las desnudas tú al mirarlas. ¿O no?

[Salvador baja la cabeza y asiente tímidamente.]

Rector : Y, en cuanto a las mártires, olvídate. Corres el riesgo de sentirte león al primer descuido. El confesionario ilustra mucho. Ya lo verás.

Hermano Salvador : Y ¿qué puedo hacer?

[El Rector deja el bolado y responde sin alterarse :]

Rector : Coger el demonio por los cuernos, (②) .

Hermano Salvador : (*Negando esa posibilidad con la cabeza.*) A mí me da miedo de que esa mujer me gane la partida.

Rector : Y a mí me da, Salvador, que en esa partida tú eres el tablero, las fichas y los dados. ¿Es que no quieres verlo?

(*Los girasoles ciegos: 56*)

表 9 *Los girasoles ciegos* の例における *hijo/a*, *chico/a* の印象

例		A	B	C	D	E	F
①	hijo	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso	cariñoso
	chico	estimulante	estimulante	poco natural	cariñoso	seco	seco
②	hijo	cariñoso	cariñoso	cariñoso estimulante	cariñoso	cariñoso	estimulante
	chico	estimulante	estimulante	cariñoso	cariñoso	duro	estimulante

まず①の結果から見てみよう。No es buen camino ese. (「そんな道は良くないよ」) という発話に *hijo* が付加されると、全員が優しく感じるという回答した。また、この例では *hijo* と *chico* との差を認める回答が多かった。*chico/a* は、聞き手に働きかける際に何らかの意味素性をプラスものではなく、文脈次第で厳しくも叱咤激励としても捉えられるものである。この例は聞き手の悩みを聞くシーンなので、*chico* を用いると聞き手を励ましている印象を与えるのだろう。また、ここでも冷たいと感じる回答が見られた。これは、先ほどと同様に優しさを付加する *hijo/a* と対立させていることによると考えられる。次に②の結果を見てみよう。これは「自分は何をすればいいのか」と問う聞き手に *Coger el demonio por los cuernos*. (「悪魔に立ち向かえばいいんだよ」) と助言する発話であり、これに伴う呼びかけ語は励ましの印象を与えることが予測されるが、その通り *hijo*, *chico* 共に励ましという回答が得られた。また、*hijo* の場合には優しく感じるという回答や、*chico* の場合には厳しさを選択する回答者もいた。*hijo* が優しく感じられるのは、疑似的親子関係を作り出すことによる効果であるが、*chico* が厳しいというのは、先の冷たさと同様に、*hijo* と相対的に比べることによる印象だろう。さらに、この例では *chico* の付加によって優しく感じるという回答も見られた。しかし、*chico/a* は和らげ効果を持たないので、(4) のように叱咤激励として機能しているのを優しさと捉えたのではないかと推測される。

検証の結果、*hijo/a* と *chico/a* には明らかな差があることが確認できた。*hijo/a* は聞き手を疑似的な子の立場に置くので、愛情が付加されて発話の和らげとなる。一方、*chico/a* には愛情を表す効果はなく、文脈に応じて厳しい、あるいは叱咤激励のような印象を与える。

5. まとめと今後の課題

スペイン語において、呼びかけ語は聞き手に何らかの働きかけをしたい場

合に用いられる。呼びかけ語を用いない場合と比べて、あらゆる呼びかけ語の付加は聞き手への働きかけを意味する。その中で *hijo/a*, *chico/a* は、どちらも基本的に年下、あるいは同年齢に使用されるという点において共通している。*chico/a* は聞き手への働きかけとしては特別な意味素性を持たない無標の形式である。これに対して、*hijo/a* は聞き手を疑似的な親子関係に置いていることを示して発話に優しさの意味素性を加える、聞き手への働きかけとしては有標の形式である。そのため、*hijo/a*, *chico/a* を対立させると、*hijo/a* は優しく、*chico/a* は文脈に応じて厳しい、あるいは叱咤激励の印象を与える。発話内容に対する話し手の態度を表明する文末の位置では、話し手はこれらの語彙を使いわけて情報を伝達するのである。

今後の課題として、他の呼びかけ語を含めた体系的な解明と、呼びかけ語全体における *hijo/a*, *chico/a* の位置づけを挙げる。特に、*hombre* は様々な位置に現われ、Beinhauer (1929: 30) によると性別に関わらず、全ての生物に対して用いることができる広い用法を持つものである。また、女性に対して用いられる呼びかけ語に *mujer* がある。女性に対して用いられる *hombre* と *mujer* には何か差があるのだろうか。今後はより広い用法を持つ *hombre* を中心として、今回特徴が明らかになった *hijo/a*, *chico/a*、また *tío/a* や *niño/a* といった他の呼びかけ語との関連を明らかにしていきたい。これらの差異を解明し、呼びかけ語全体を体系づけたいと考えている。

註

*本稿は日本イスペインヤ学会第60回大会（2014年10月11日、大阪大学）における口頭発表をもとに加筆修正したものです。当日貴重なご意見をくださった先生方に厚く御礼申し上げます。

- 1) 発話が聞き手にどのように聞こえるかを小田 (2010) はこのように呼んでいる。
- 2) 本稿では、使用環境を均質にするためスペインのスペイン語に限って例文を収集した。
- 3) Beinhauer (1929: 38-39) はこのような用法を「虚構的侮辱 (*insultos ficticios*)」と称している。スペインで見られる親しい女性に対する “*Adiós, fea.*” という挨拶もこれにあたる。
- 4) ピリオドや疑問符、感嘆符までを1つの文とみなした。なお、ここでは、固有名詞だけでなく *hijo mío* や *señor* 等の呼びかけ語としての普通名詞も例数に含めている。
- 5) 母語話者による報告。
- 6) アンケートはスペイン人男性4名 (30代)、女性2名 (20代) に対して実施した。本

来は実例を用いるべきだが、話者同士の親疎関係、年齢差、性別の全ての条件を満たす実例が得られなかったので、作例を用いた。

- 7) Some acts intrinsically threaten face ; those ‘face threatening acts’ will be referred to henceforth as FTAs. (Brown & Levinson 1978: 60)

参考文献

- Alonso Cortés, Ángel (1999) El vocativo, *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque *et al.* coords.) vol.3, Espasa Calpe, Madrid, pp. 4037-4047.
- Bañón, Antonio Miguel (1993) *El vocativo-Propuestas para su análisis lingüístico*, Octaedro, Barcelona.
- Beinhauer, Werner (1929; 1963) *El español coloquial*, Gredos, Madrid.
- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1978 ; 1987) *Politeness. Some Universals in Language Usage*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Edeso Natalias, Verónica (2005) “Usos discursivos del vocativo en español”, *Español Actual* 84, Arco/Libros, Madrid, pp. 123-142.
- Moliner, María (1998; 2007) *Diccionario de uso del español*, Gredos, Madrid.
- Salvador, Gregorio (2001) *Nuevo diccionario esencial de la lengua española*, Santillana, Madrid.
- Seco, Manuel *et al.* (1999; 2011) *Diccionario del español actual*, Aguilar, Madrid.
- 野村明衣 (2014) 「スペイン語における情報伝達の方策—スペイン語間投詞と日本語終助詞に関する対照分析—」, 博士論文, 神戸市外国語大学, 神戸.
- 小田希望 (2010) 『英語の呼びかけ語』, 大阪教育図書, 大阪.
- 高垣敏博 他 (2007) 『西和中辞典 第二版』, 小学館, 東京.

資料

- Almodóvar, Pedro (2002) *Hable con ella*, Ocho y Medio, Madrid.
- Azcona, Rafael y José Luis Cuerda (2008) *Los girasoles ciegos*, Ocho y Medio, Madrid.
- Miguel Mihura (1979) *Tres sombreros de copa*, Ediciones Cátedra, S.A. Madrid.

Los vocativos *hijo/a* y *chico/a* en español

Mei NOMURA

En la tesis doctoral concluimos que los vocativos finales expresaban varias actitudes del hablante hacia el contenido del enunciado anterior (Nomura 2014). Por el uso de los vocativos nominales y adjetivos, el hablante manifiesta la posición del oyente y trata de suavizar o enfatizar el enunciado. Los vocativos *hijo/a* y *chico/a* se usan normalmente de personas mayores a menores o de misma edad, pero sus usos no quedan claros. En este artículo, trataremos las situaciones en las que se usan estas expresiones y su influencia en el enunciado.